巻頭言

いま、〝保育の世界〟が面白い

箙　光夫

日本の少子社会は、官製の「お見合い」まで現れるほど、深刻になっているという認識がどこかにある。幼稚園では三歳児の保育を定着させ二歳児までも保育の対象としている。保育園では定員を上回る乳幼児の受け入れをしながら待機児童の解消に努めている。様々な少子化対策が打ち出され、保育の現場が努力しながらも、一向に少子化現象は留まるところを知らない。少子社会の根っこの部分が根深い様に思える。いま、保育の現場と関わるひとりとして、この日本の少子社会に対して何らかの見解と接近する手立てが求められていると考えるならば何であろうか……。

〈保育〉が急激に拡大された一九六〇年代、日本経済の高度成長は、各地に新しい団地を造成させ核家族を急増させ、行政が保育園を増設させてきた経緯がある。その担い手は各都道府県の保育専門学院で養成された保育者であり、いわば〝公立〟による施設と人材によって担われてきたと言える。幼稚園でも定員が三〇〇名、四〇〇名という大規模園が開設され、その頃、保育者の有資格者を養成する私学の短大も相次いで開講している。

三十年を経過した一九九〇年代に入り、それまであまり馴染みのない〝合計特殊出生率〟が一・五〇を維持できない少子化社会を日本社会が迎えたことが、高齢化の進行とともに危機感を持って捉えられ始めた。現在では、高齢化対策と同様に様々な少子化対策が打ち出されながらも合計特殊出生率は一・三〇を維持できない少子社会になっている。

そして、この三十年の年月の間には保育の世界で大きな変化が見える。

そのひとつに、幼稚園、保育園の垣根が限りなく低くなり始めていることがある。保育園の保育時間が朝七時から夕方七時まで延長され、産後五十八日から保育する産休明け保育も実施されている。幼稚園においては、二歳児の保育も検討され、保育園同様時間外保育や子育て支援事業も展開している。改めて、その独自性を模索する状況を迎えている。そして、もうひとつが、〝公設民営化〟の動きである。いくつかの自治体では、既存の公立保育園の民間委譲が始まっている。保育園が保育時間を十二時間以上にし、産休明けの

五十八日からの乳児の保育を実践し、さらに不特定の親子をも受け入れる支援事業を展開していることは、すでに保育園はこれまでの施設のあり方からの変容を求められている。

もっと積極的な理解の仕方をするならば、私たち日本人が共に育つ共同体、生活体を模索する役割を担い始めている。ここで親の責任の取り方や家族のあり方を問題とするのではなく、子どもにとって育つ環境や社会のあり方を考えると、幼稚園、保育園が既にその地域の中で担い始めているということではないだろうか。

改めて言うまでも無く、幼稚園、保育園は、個人と集団の関係のあり方を学ぶ基本的な役割を担い、生活体として個人の集団のあり方を模索する場である。こうした営みはもはや、行政の主導で運営されるものではなく、そこに参加する人たちで模索されなければならず、行政はそれらを側面から支援することが必然となろう。幼稚園、保育園の実践の中には、地域の中で子どもと親たちの育ち合う場としての役割を充分に担い、園の行事ひとつひとつがその地域の大切な年間行事に成長し、地域の人たちの参加を得ながら運営されている。こうした園の行事が地域の行事に成長するとき、保育の担い手である保育者の役割も変化する。子どもたちと一緒に遊び回る新人保育者、無我夢中で保育の研修を重ねる中堅の保育者、ゆったりと子どもたちを受けとめる役割を担うベテラン保育者、親との関係、地域との関係や調整役を担う保育者と、その役割が変化し育ち合っている。そして、

女性だけの社会の幼稚園、保育園に男性保育者の参入の必然性も当然の流れとして求められている。そして、保育者の養成が私学の短大、大学にその役割が移行していることとも並行している。

このような実践に取り組んでいる園長から〝保育者養成の教育課程がどうなっている〟と問われると、〝各養成校が教育課程の大綱化の動きの中で独自性を発揮したカリキュラムの編成に努力している〟と答えながら、各養成校はどのような保育者を養成するか、明確な目標を掲げその目標の達成に取り組むカリキュラム編成は、養成校教員の誰もが保育の問題と関わるフィールドを持つことと、教育原理、保育原理といった教科、保育内容、保育実習といった実践的な方法論も担当できる〝専門性〟が求められ、この専門性は、養成課程の教育実践がまさしく総合学習の実践の場として先駆的な役割を担い、保育の現場との共同研究の可能性を切り開くものに成長することに繋がりたい、と強く思う。

幼稚園、保育園がその地域の中で人の育ち合う共同体、生活体を創造するとき、養成校の教育実践が総合学習の実践の場として成長するならば、その地域に於て相互の交流と共同研究を可能にし、保育の現場と養成校の相互関係の中で、新しい〝保育の世界〟を創れるだろうと、わくわくして来るのは私だけだろうか……。

（千葉明徳短期大学学長）